

3. 令和6年に特に注意を要する病害虫

(研究成果名：令和5年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫)

道総研 中央農業試験場 病虫部 予察診断G

1. はじめに

北海道病害虫防除所、道総研各農業試験場、および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から令和6年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 令和5年度の病害虫の発生状況

令和5年度は春季から秋季まで高温に経過し、特に夏季の記録的な高温は病害虫の発生に大きく影響した。高温性の病害が多発し、害虫では早発や旺盛な増殖、加害活動が被害を拡大させた。

主要病害虫で多発したとなったのは、水稻の紋枯病、秋まき小麦の赤さび病、春まき小麦のムギキモグリバエ、ばれいしょの軟腐病、そうか病、だいこんのキスジトビハムシ、りんごの腐らん病であった。てんさいの褐斑病では秋季も高温傾向が継続したことにより発生が拡大し、全道各地で被害が多発した。やや多発となった病害虫と併せて表1に示した。

この他、飛来性の害虫による被害が多発した。マメノメイガによる小豆の被害が道南、道央を中心に全道各地域で認められたほか、シロオビノメイガやオオタバコガの飛来がてんさいや野菜類に被害をもたらした。侵入調査事業における侵入警戒動植物であるトマトキバガの飛来も全道各地で確認され、道南ではトマトで被害が確認された。

病害では、りんごの炭疽病の発生が多かった。セイヨウチャヒキ（野生種エンバク）のいもち病が道内各地で散発し、特に十勝地方での多発が問題となった。

3. 令和6年に特に注意を要する病害虫

1) トマトのトマトキバガ

今年度、侵入警戒有害動植物であるトマトキバガの飛来が全道各地で確認された。8月下旬には施

設栽培トマトで葉や果実に食害痕が発生し、被害が確認された。本種の発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター等に連絡する。発生を拡大させないため、薬剤散布を行うとともに、被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋没するなど適切に処分する。越冬ハウスでは残さやナス科雑草等の寄主植物を除去する。薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

表1 令和5年度に多発・やや多発した主要病害虫

作物名	病害虫名
水稻	<u>紋枯病</u>
秋まき小麦	<u>赤さび病</u> 、 <u>眼紋病</u>
春まき小麦	<u>ムギキモグリバエ</u>
小豆	食葉性鱗翅目幼虫
ばれいしょ	<u>軟腐病</u> 、 <u>そうか病</u>
てんさい	<u>褐斑病</u> 、ヨトウガ（第1回、第2回）
たまねぎ	軟腐病、 <u>タマネギバエ</u> ・ <u>タネバエ</u> 、 <u>ネギアザミウマ</u>
ねぎ	<u>さび病</u> 、 <u>ネギアザミウマ</u>
にんじん	黒葉枯病
だいこん	軟腐病、 <u>キスジトビハムシ</u>
ブロッコリー	コナガ
りんご	<u>腐らん病</u>

下線は多発生となった病害虫を示す

2) 小豆のマメノメイガ

今年度、全道各地の小豆ほ場でノメイガ類による莢や花の食害が多発し、マメノメイガ幼虫が主体であることが確認された。本種は葉裏や莢等に

産卵し、幼虫もこれらの部位を食害する。令和5年は小豆の播種時期が遅いほ場で被害が大きい事例が確認された。飛来性と考えられており、例年アズキノメイガの発生が少ない地域でも突発的に発生し世代を繰り返すため、被害拡大に注意が必要である。今年度の発生状況から、当面の対策としては、播種は適期に実施し、ノメイガ類に登録のある農薬を用いて茎葉散布する。通常のアズキノメイガの防除時期に加えて開花始め及び9月以降の防除も有効と推測される。

3) てんさいの褐斑病

令和5年度は6月中旬以降の高温により初発時期が早まった。夏季を通して気温が高く、発生量が増加し、道内全域で被害が認められた。今年度の多発により一次伝染源が多く存在するため、令和6年も早発・多発に注意する必要がある。耕種的な対策としては、連作を避け、可能な限り抵抗性の強い品種の導入が有効である。薬剤散布は遅くとも初発直後までに開始し、散布間隔が開きすぎないように注意する。多数の薬剤で耐性菌の発生が確認されているため、マンゼブ剤を基幹とした防除を実施する。

4. 令和5年度に新たに発生を認めた病害虫

令和5年度に新たに発生を認めた病害虫は17(病害10、害虫7)である。一部を抜粋して紹介する。

1) かぼちゃのホモプシス根腐病(新発生)

晴天の日に茎葉の萎れが見られるようになり、茎葉の生育が衰退していった。ウリ科を侵す土壌病害であるが、数年前より同時期の萎れが観察されていたものの湿害と判断されていたことがあり、注意が必要。発生株の毛細根、側根に特徴的な黒い墨様の偽子座が観察される。これまで道内ではきゅうりやメロンで発生が確認されている。

2) かんしょのタバココナジラミ(バイオタイプQ)(新発生)

施設内で栽培されている苗で発生が確認され、

苗の移入に伴って侵入したものと推測される。オンシツコナジラミよりやや小型で、道内未発生のトマト黄化葉巻ウイルスの媒介虫として知られる。

3) ぶどうのチャバネアオカメムシ、ブチヒゲカメムシ(新寄主)

醸造用ぶどうで、肥大期の果実に吸汁害が発生した。被害果は口針の差し痕に黒点を生じ、周辺が変色・陥没した。その後は腐敗するか、腐敗を免れ収穫に至った果実でも小粒化や糖度低下が認められた。両種はいずれも広範な植物を加害する。

4) セルリーの萎縮炭疽病(新発生)

新葉に細かい褐色のえそ斑点を生じ、奇形や萎縮症状を伴う。症状が激しい株では、外葉や葉柄部にも斑点を生じる。病原菌は比較的高温性であり、夏の作型で特に注意が必要。

特に注意を要する病害虫および新発生病害虫の詳細な情報については、[北海道病害虫防除所のホームページ](#)に掲載していますので、そちらもご覧ください。

